

[成果情報名]バレイショ「さんじゅう丸」の一期作産種いもを用いた春作マルチ栽培における増収および腐敗抑制方法

[要約]バレイショ「さんじゅう丸」の一期作産種いもを用いた春作マルチ栽培においては、5月中旬以降に収穫すると収量性が確保できる。透明マルチを用いる場合、株間を20cmにすると増収および腐敗抑制ができる。また、黒マルチを用いると5月下旬以降の腐敗を効果的に抑制できる。

[キーワード]ジャガイモ、バレイショ、さんじゅう丸、一期作産種いも、春作マルチ栽培

[担当]長崎県農林技術開発センター・農産園芸研究部門・馬鈴薯研究室

[連絡先](直通)0957-36-0043

[区分]いも類

[分類]指導

[作成年度]2014年度

[背景・ねらい]

そうか病に強く、多収で外観が良いバレイショ「さんじゅう丸」（長崎県育成、2012年7月品種登録）は急速に普及が進んでおり、2013年には県内で105ha作付けされている。今後、「さんじゅう丸」の普及拡大に伴い、一期作産種いもが導入される予定であるが、一期作産種いもを用いた春作マルチ栽培では、県内産種いもを用いた場合と比較すると、上いも重がやや低く、増収対策が課題である。また、一期作産種いもを用いた春作マルチ栽培では、生育後期においてやや見られるため、腐敗抑制が課題である。そこで、株間および被覆資材の違いによる収量性および腐敗発生率の違いを調査する。

[成果の内容・特徴]

1. 被覆資材および株間にかかわらず、上いも重は4月下旬から5月中旬にかけて大きく伸びるため、上いも重を確保するには5月中旬以降に収穫する（図1）。
2. 透明マルチを用いる場合、密植条件は標準植条件に比べ、上いも重が高く、腐敗が少ない傾向である（図1）。
3. 黒マルチを用いると、透明マルチを用いる場合に比べ、腐敗が少ない傾向であり、腐敗発生時期は遅い（図1）。
4. 透明マルチで密植条件および黒マルチで標準植条件では、透明マルチで標準植条件に比べ、地温が低く、特に5月下旬以降はその傾向が顕著であるため、生育後期の腐敗の発生が少ない（図2）。

[成果の活用と留意点]

1. 試し掘りを行い、塊茎肥大状況および腐敗発生状況を確認しながら適期収穫を心がける。

[具体的データ]

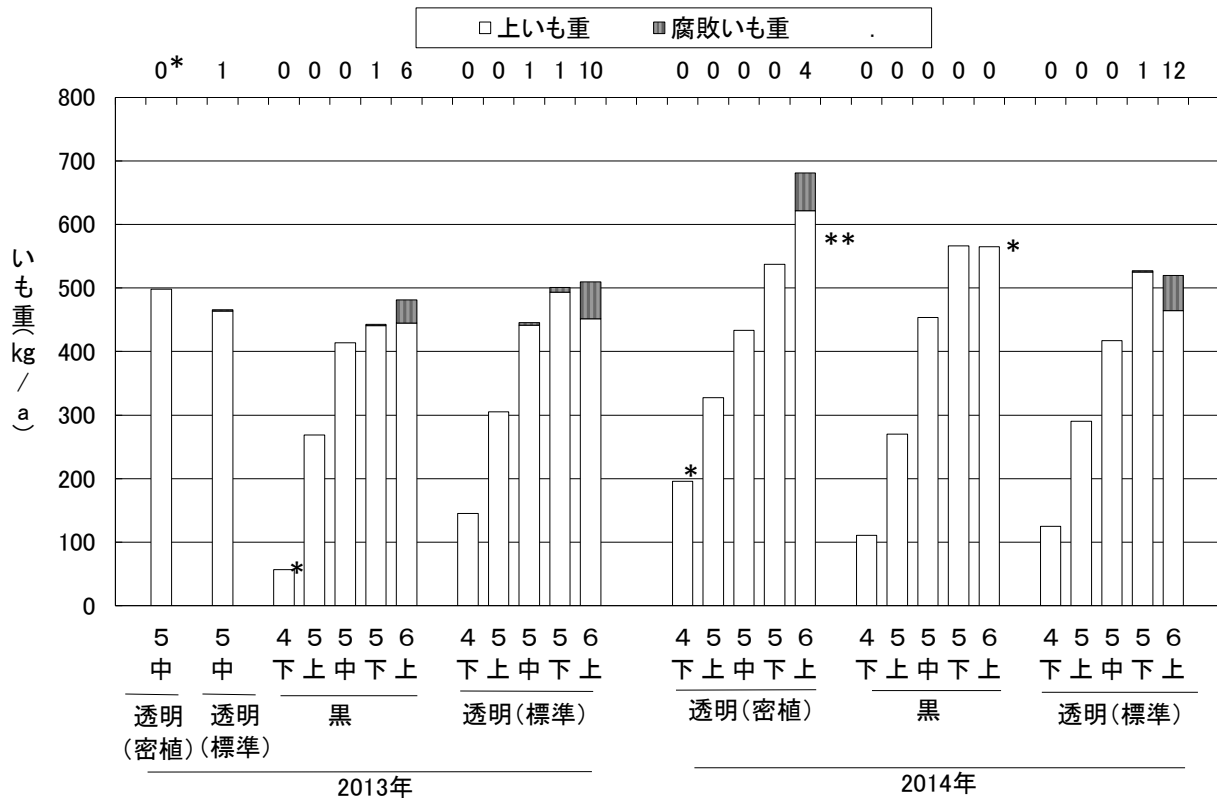


図1 被覆資材・株間・収穫時期の違いによる上いも重、上いも1個重、腐敗

注1) ** は1%水準、* は5%水準で各年次の透明(標準)に対して有意差あり
 2) 2013年の透明(密植)およびその対照の透明(標準)は別試験区で行った

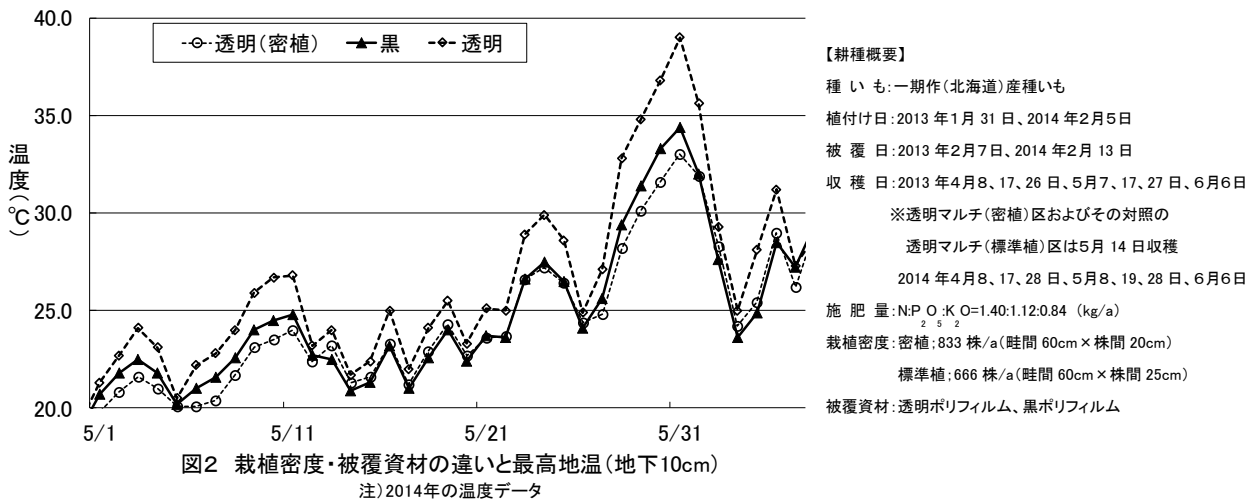


図2 栽植密度・被覆資材の違いと最高地温(地下10cm)
 注)2014年の温度データ

[その他]

研究課題名: 「さんじゅう丸」の品種特性を活かす栽培技術の開発
 予算区分: 県単(経常研究)
 研究期間: 2013~2014年度
 研究担当者: 坂本悠、森一幸、松尾祐輝、渡邊亘、中尾敬